様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５３０９１０

研究課題名（和文）教職のメリトクラシーに関する社会学的研究－高校教師へのインタビュー調査をもとに－

研究課題名（英文）A Sociological Study of Meritocracy in the Teaching Profession

研究代表者
金子　真理子（Kaneko, Mariko）

東京学芸大学・教員養成カリキュラム開発研究センター・准教授

研究者番号：７０３３４４６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,200,000円、（間接経費）　960,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、相互に関連して発展した三つの関心に基づく調査を行った。第一に、都立高校教師に対するインタビュー調査をもとに、教師が「教職のメリトクラシー化」の改革動向をどのように受けとめているのかを検討した。第二に、東日本大震災と原発事故に対する教師たちの受け止め方を聞き取りながら、教職という仕事とともにカリキュラムを再検討する必要性を論じた。第三に、カリキュラムを検討し直す手がかりの一つとして、英国における科学教育の教科書の変化を題材にしてカリキュラムの社会学的分析を行い、その政治性を検討した。最後に、教職という仕事をカリキュラムとの関連で比較社会学的に検討するという分析枠組みの重要性を示した。

研究成果の概要（英文）：I conducted research from three points of reciprocally-affected perspectives. Firstly, I analyzed the social characteristics of the teaching profession by focusing on teachers'struggles against the recent reform. Secondly, hearing from teachers how the teaching was affected by Tohoku earthquake and Fukushima nuclear disaster, I found the curriculum was a crucial issue in their teaching. Thirdly, I made a sociological exploration on curriculum based on textual analysis and interview with authors of Twenty First Century Science: A GCSE Science Textbook in England. I explored the reason why the precautionary principle and ALARA in the first edition were deleted from the second edition. Many informants made an explanation such as the exam board and the publisher deleted them because these complex concepts were not examinable. However, even if they were deleted not because of pressures from the government, but for practical reasons, the background and the consequence would be political.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：教師　教職　カリキュラム

１．研究開始当初の背景

戦後日本の教育において、教職という仕事に目を向けると、メリット＝業績を基準にして、教師の報酬や社会的な地位が決まる仕組みになっているとは必ずしもいえなかった。これに対し、2000 年以降、行政主導で「教職のメリトクラシー化」を図ろうとする一連の教員施策が進められている。このような動向を背景として、本研究は、教職という仕事の専門性と社会的特質、およびその変容の兆候を明らかにすることを目的として企画された。

２．研究の目的

本研究の目的は、国際比較の視野を持って、教職という仕事の専門性と社会的特質を明らかにするとともに、その変容の兆候と動因について検討することである。教職、なかでも「教えるという仕事」に焦点を当てる時、本研究は、既存の社会に潜むリスクの指摘を含めたいかなる知識が、カリキュラムを通して伝達されているのかという点に注目する。ここでは、教室で使用される教材の背後にある目的と思想、教師の解釈と認識、そこでの多様な意見の取り扱い、といった問題に注目して、カリキュラムの社会学的分析を行いながら、それとの関連で、教職という仕事の社会的特質を明らかにする。最後に、このような教職という仕事にとって、教員評価、学校評価、教職のメリトクラシー化、および教育の市場化といった動向がどのような意味をもつのかを、社会学的に検討する。

３．研究の方法

本研究では、リスク社会におけるカリキュラムのあり方を検討したうえで、教職という仕事の社会的特質をあらためて問い直していく。第一に、学校はリスクを含めた社会の状況をどのように伝えているのか、カリキュラム編成の背後にある思想、カリキュラムとしての体現、それを遂行する教師の認識と能力、多様な意見の取り扱い、といった問題を含めて、教職という仕事の特質を明らかにする。第二に、教師がそのような教職という仕事を遂行するために、いかなる学校組織が有効なのかを検討していくために、日英両国における現在の学校組織の現状を調査すると同時に、現行組織に対する教師の認識について明らかにする。第三に、教職という仕事にとって、教員評価、学校評価、教職のメリトクラシー化といった動向がどのような意味をもつのかを社会学的に検討すると同時に、教師、生徒、保護者の声が、学校の「日常」をどのように創り変えていけるのか、そのための学校組織のあり方について、検討を加えた。

研究代表者は、2012 年 8 月までは東京都で 15 名の教師にインタビュー調査を行った。2012年9月からは研修専念期間を取得して渡英し、ロンドン大学を拠点に調査と論文執筆を行った。渡英中は、イングランドの義務教育の最後の二年間（キー・ステージ４）で必修の「GCSE サイエンス」という科目のコースの一つ、「Twenty First Century Science」コースに準拠した教科書の近年の変化に注目し、その変化の背景を社会学的に分析する作業を行った。ここで採用した方法は以下である。

第一に、このコースに準拠した教科書 Twenty First Century Science GCSE Science Higher の第１版（2006 年刊行）から第 2 版（2011 年刊行）への変化の要点とその意味を明らかにする。第二に、本コースの内容を規定しているコース内容規定文書（Specification）の年度間比較分析、ナショナルカリキュラムに基づいてコース内容規定文書を規制している GCSE 教科規準（GCSE Subject Criteria for Science）の年度間比較分析、両年度間共通のナショナルカリキュラムの分析を行う。第三に、この教科書の作成とプロデュースにかかわっているナフィールド財団と教科書執筆陣を中心とした教科書作成グループ、および、科学教育の専門家や科学教師たちに対して継続的に実施しているインタビュー調査（表 1）から得られたデータを分析する。第四に、イングランドのカリキュラム開発と教科書作成のシステムと文化、および、教師文化に関する知見を動員する。

2013 年 9 月に日本に帰国した後は、日英で実施した調査結果を比較検討しながら、第一に、カリキュラムと教職という仕事の関係性について分析した。第二に、教職のメリトクラシー化、および教育の市場化といった動向が、教職という仕事と学校カリキュラムに対して、どのような影響を与えるのかを検討した。

表 1　英国調査におけるインタビュー対象者（20 名）の概要

A	第１版のプロジェクトディレクター・執筆者、第 2 版のプレジェクトディレクター、Beyond2000 の編者、大学教員
B	第 2 版のプロジェクトディレクター・編者、「GCSE 物理学」と「GCSE Twenty First Century Science」のパイロット版の際の元主任試験官、大学教員
C	第１版プロジェクトオフィサー・編者・執筆者（Pysics）
D	第１版と第 2 版の執筆者（Pysics）
E	第 1 版のプロジェクトディレクター・編者・執筆者、第 2 版の執筆者（Pysics）
F	第 2 版の執筆者（Chemistry）
G	Nuffield Foundation 勤務、第１版のプロジェクトオフィサー、第 2 版のプロジェクトディレクター
H	Nuffield Foundation 勤務、第 2 版のプロジェクトディレクター・編者
I	元 QCA 勤務
J	Beyond2000 の編者、大学教員
K	大学非常勤、元学校教員

L　大学教員、元学校教員
M　大学教員
N　大学教員
O　大学教員
P　大学教員
Q　ノンセレィティブな公立学校の教頭
R　セレクティブな公立学校の教師（Head of Science）
S　私立学校の教師（Head of Science）
T　ノンセレクティブな公立学校の教師（Head of Science）

＊ほとんどが教師経験者

４．研究成果

本研究は、相互に関連して発展した三つの関心に基づく調査を行った。第一に、東京都立高校の教師に対するインタビュー調査をもとに、「教職のメリトクラシー化」の改革動向が教職という仕事にどのような影響を与えているのか、教師はそれをどのように受けとめているのかを明らかにした。第二に、2011年3月11日の東日本大震災とそれを契機とした原発事故に対する教師たちの受け止め方を聞き取りながら、教職という仕事とともにカリキュラムを再検討する必要性を論じた。第三に、教職という仕事を検討し直す手がかりの一つとして、英国における科学教育のカリキュラムを題材にして考察した。

(1)「教職のメリトクラシー化」と教師

本研究は、東京都立高校をフィールドにインタビュー調査を実施し、「教職のメリトクラシー化」の改革動向をめぐる教師の攻防に注目することによって、教職という仕事のアンビバレントな社会的特質を読み解く試みである。以下では、東京都の教員施策と管理職・主幹職選考の現状をおさえた上で、教師を対象としたインタビューデータを分析する。教職という仕事は、二重の意味において、アンビバレントな社会的特質を有している。第一に、この仕事は、変容しつつある社会的要請(「外の目」)と、教師が教職経験の中で積み上げてきた経験知(「内の目」)との間の綱引きの上に成り立っている。第二に、学校という場は、人材の選抜・配分機能を担う側面(機能)のみならず、教師と生徒のコミュニケーションによって成り立っているという側面をあわせ持っている。教師は、多かれ少なかれ、以上の特質に起因する綱引きの上に立って仕事をしてきている。しかし、近年の改革動向は、教職という仕事のアンビバレントな社会的特質の片方の側面(「外の目」/人材の選抜・配分機能を担う側面)にのみ光が当てられもう片方の側面が無視されていると、教師たちは感じ、抵抗感を抱いている。一方で、教職という仕事のアンビバレントな社会的特質に迫りくるこのような力関係の変容は、教師がこの綱引きの上に立ち続けることを難しくさせている。最後に、教師がそこに踏みとどまって立ち続けることの意味を分析した上で、それを保証するためのしくみについて検討を加えた。

(2)リスク社会と教師

2011年3月11日の東日本大震災とそれを契機とした原発事故は、私たちがリスク社会の中に既に生きていたことを気付かせるのにあまりある。それでも学校は、「日常を取り戻す機能」を素早く発揮した。東京近郊の教師の言葉を引用する。

ア教師　「地震直後も、生徒たちが教室でまったりしていた。校庭に避難させたが、ゲームをしたり、携帯で写メールを取りあったりしている生徒までいた。その後も、学校の様子はほとんど変わらなかった。まるで何事もなかったかのように日常生活を営んでいる感じである。」

イ教師　「原発事故後の「日常」を生成する装置として学校は大きな機能を果たしている。しかし、機能を働かせている当事者である私たちにその自覚は薄く、この「日常」の表面的な穏やかさとは裏腹に、深層に痛ましい無関心を拡大させている。放射能との生活はすでに日常となりつつあるが、この状況は水俣での凄惨な過去と酷似している。」

これらの教師が感じているのは、学校の一側面、「日常を取り戻す機能」の強固さである。イ教師は、原発事故後の「日常」を生成する装置として、学校は確かに大きな機能を果たしていると考え、この機能を働かせている当事者として、教師、すなわち自らをも批判的に見ている。「私たちにその自覚は薄く、この日常の表面的な穏やかさとは裏腹に、深層に痛ましい無関心を拡大させている」と。

三・一一後の学校を振り返った教師たちの言葉の中には、これまで自明視されてきた学校の形態や機能と、それを形成する当事者としての教師自身の自覚をも、問い直そうとする契機が潜んでいた。

リスクの定義が争点になるような社会では、既存の科学的知識を信仰するだけでは生きていけない。個々人がリスクを回避するために、巷にあふれる多種多様な知識の中身を吟味した上で、自らが納得する科学的知識に頼らざるを得なくなる。それは、個人に多大な負担を課す社会である。

だからこそ、何のために学ぶのかが、今までとは異なる文脈からも問われてくる。学校は、子どもが社会の現実―私たちが否応なく背負わせてしまう現実―に向き合いながら、将来にわたって不安や不確実性に主体的にかかわっていくための基礎となる知識を伝えていかなければならない。同時に、人々が横につながってこれまでの「日常」を創り変えていけるような原動力を、学校の実践が身をもって伝えていける場になるといい。

このような学びの意味を自覚したとき、私たちは、いかなる知識を生産し、伝え、教えるべきだろうか。手がかりの一つとして、英国における科学教育のカリキュラムを題材

に考察をすすめた。

(3) 英国の科学教育カリキュラムの変容

①Twenty First Century Science への注目

研究代表者は、上述の問題関心を持って、イングランドの義務教育の最後の二年間（キー・ステージ４）で必修の「GCSE サイエンス」という科目のコースの一つ、Twenty First Century Science（以下、21CS と記す）に準拠した教科書の近年の変化に注目した。

Twenty First Century Science GCSE Science Higher の第１版は 2006 年に刊行された。これは、中等教育段階における科学教育の目的を問い直し、「すべての若い人たちにサイエンス・リテラシーを身に着けさせること」を目的として掲げた、類をみないコースであった。ただし、2011 年刊行の第 2 版をみると、その内容はいくつかの点で大幅に変更された。本研究が特に注目したのは、イントロダクションの改変、学習内容の組み替え、そして最後に、第１版では繰り返し表れた「予防原則」(precautionary principle) と ALARA（as low as reasonably achievable）という二つの原則に関する記述が削除された点、である。

まず、イントロダクションに注目すると、第１版では、従来の学校科学教育とは一線を画した本コースの目的―「すべての若い人たちにサイエンス・リテラシーを身に着けさせること」が何よりもアピールされた。これに対し、第 2 版では、本書が生徒にとって有効な試験対策になるという点が強調された。第 1 版は目的志向型アピール、第 2 版は評価志向型アピールといえるだろう。

そして、第１版を読み進めると、この教科書の作成者たちが従来の慣習にとらわれず、イントロダクションに掲げられた目的を果たそうと腐心した跡が随所に見受けられる。そこでは、教えられるトピックが身近な問題に絞りこまれた上で、生徒自身が生活、科学、社会との関係性を具体的かつ批判的に捉え直すことを促すようなアプローチが採用されていた。新たな目的を謳うだけではなく、その目的の実現に向けて、第１版が選択したトピックとアプローチは、他の教科書に較べて差異が際立ち、時にはチャレンジングともいえる記述を生み出すものであった。

象徴的なのは、「予防原則」と ALARA という 2 つの原則に関する記述である。科学の教科書としては、すでに確立されオーソライズされた科学的事実を中心に記述するほうが無難な選択であろう。これに対し、「予防原則」や ALARA を教科書に盛り込むということは、従来の科学の教科書の慣習を超えた新たな試み・チャレンジであり、これに対し賛否両論が沸き起こる可能性は想像に難くない。にもかかわらず、Twenty First Century Science GCSE Science Higher 第１版に、これらの記述があえて盛り込まれたのは、21CS コースの目的に呼応した内容だったからだと考えられる。必修の GCSE サイエンスという科目において、21CS が、自らを他と差異化しつつ重点をおいたのは、「すべての若い人たちにサイエンス・リテラシーを身に着けさせること」であった。第１版のイントロダクションは、そのための方法として、「議論の両サイドからの異なる証拠を比較評価する」「あなたに影響を及ぼす科学に関する諸問題について意思決定する」スキルを、すべての若い人たちに身につけさせると宣言した。このうち、「予防原則」および ALARA は、「あなたに影響を及ぼす科学に関する諸問題について意思決定する」際の羅針盤の一つとして選ばれ、未来の市民たる生徒たちに提示されたものだと思われる。しかしながら、2011 年において、これはイントロダクションの改変と同時に、削除を余儀なくされたのである。

②「予防原則」と ALARA はなぜ削除されたのかという問い

なぜ、この 2 つの原則は削除されたのか。本研究では、これら 2 つの原則の是非や、これらが GCSE サイエンスの教科書の内容としてふさわしいかどうかを問うことが目的ではない。そのような立場からではなく、これらの記述が教科書に盛り込まれたことの意味とそれが削除されたことの意味について、社会学的に考察することが主眼である。

教科書の全体構成から、ひとまず内在的に考察するならば、第１版は、トピックを絞りこむ一方で、それを様々な角度から科学的かつ批判的に検討している。その上で、「あなたに影響を及ぼす科学に関する諸問題について意思決定する」ことを生徒に問いかけると同時に、その方法について、時には判断の方向性を含めて示唆するというスタンスに立った。これに対し、第 2 版は、より幅広い科学的事実を網羅的に伝える一方で、科学技術の利用に関しては、リスクと便益の両論併記にとどまり、個人や社会の判断には立ち入らないスタンスが貫かれている。このような全体的なスタンスの変化の中で、科学的事実として確立されていない、「予防原則」および「ALARA」といった原則は、第 2 版からは削除される必然性があったのかもしれない。しかしながら、この 2 つの原則が削除されたことによって「あなたに影響を及ぼす科学に関する諸問題について意思決定する」ための一つの契機が失われたのと軌を一にして、この目的までもが以前のように強調されなくなったようにみえるのである。

ただし、このような考察は、「予防原則」と「ALARA」が削除された理由を、テキスト内在的に分析した結果に過ぎない。そもそも、「予防原則」および「ALARA」の削除を余儀なくさせる以上のような流れは、どこから、なぜ、起きたのか？このような動きに対して、抵抗する力はどこにも存在しなかったのか。21CS という類まれなコースを生み出した同じ社会が、その「後退」ともみえる動きを許さざるを得なかったのは、いったいなぜなの

か。このような疑問が、いまだ残っている。本研究の課題は、この教科書がいかなる社会的関係性の網の目の中で、どのように誕生し、受け入れられ／批判され、変容を余儀なくされたのか、というプロセスと、その背後にあるマイクロポリティクスを、データに基づいて明らかにすることにより、現代社会における知識の伝達のありようと、それを支配するポリティクスを明るみに出すことである。

③カリキュラムの社会学に向けて

最後に、「予防原則」と「ALARA」が削除された背景を分析する観点を述べる。

第一に、教科書とナショナルカリキュラムとの関係を検討したい。現行の GCSE サイエンスのナショナルカリキュラムは、2004 年に改訂され、2006 年から実施されている。すなわち、Twenty First Century Science GCSE Science Higher の第 1 版と第 2 版は、同じナショナルカリキュラムの下で作成されたものである。キー・ステージ 4 の GCSE サイエンスの学習プログラムは、それまでの 1999 年改訂版のナショナルカリキュラムから大きく変わり、より大綱化されると同時に、市民の「科学的リテラシー」の促進を目標とするものに書き改められた。ここでは、「すべての子どもが自らの科学的理解を、自分や他者のライフスタイルと関連させたり、社会の中での科学および技術の発展と関連づけて捉えたりする力を伸ばす」「多くの子どもが科学および関連分野に進むための基盤になるような理解とスキルを伸ばす」という目標が併記されている。これは、21CS コースが基づいた Beyond2000 （Millar, R. and J. Osborne, eds. 1998）の提言と合致している。このような新しい目標が掲げられたにもかかわらず、学習プログラムはそれまで以上に大綱的に示されたため、このナショナルカリキュラムの解釈は多様に存在しうる。実際、特に 2006 年時点では、コース内容規定文書の間の相違は大きかった。なかでも 21CS のコース内容規定文書とそれに準拠した教科書第 1 版は、先に示した通り、先鋭的な独自性を有していた。しかし、21CS は、多くの点で理念を共有する同じナショナルカリキュラムの下にあるにもかかわらず、2011 年にはその独自性を後退させていったのである。

第二に、教科書の内容を直接的に規定しているものとして、コース内容規定文書（Specification）がある。Twenty First Century Science GCSE Science Higher は、試験機関 OCR が公式推奨しているものである。それゆえ、教科書の内容に関しては、教科書作成グループに一定の裁量は担保されるとはいえ、OCR が示すコース内容規定文書に則っている。この教科書の第 1 版刊行時と第 2 版刊行時のコース内容規定文書を比較すると、「予防原則」および「ALARA」の内容規定は前者にのみ存在した。すなわち、OCR がこれらをコース内容規定文書から削除した時、教科書作成グループもあえてこれを復活させなかったといえる。OCR および教科書作成グループの関係性と、それぞれのレベルでの判断のプロセスと背景を明らかにする必要がある。

第三に、教科書作成のシステムと文化について検討する必要がある。イングランドでは、教科書は民間会社による自由発行であり、国家による教科書検定制度はない。一方で、GCSE 試験に関しては 3 つの試験機関が複数のコースを提供し、コースによってナショナルカリキュラムの解釈と具体化の方法が大きく異なっている。そのため、教科書の生産プロセスは、ナショナルカリキュラムの解釈の余地が高い一方で、教科書採択をめぐる激しい市場競争にさらされる環境にある。したがって、この生産プロセスには、政策、試験機関、教科書作成グループ等の当初の理念や意図のみならず、学校、教師、生徒、保護者をはじめとする需要側の思惑が大きく作用しうる。教科書がこのような市場メカニズムの中で生産されていることを念頭に置いて分析しなければならない。

第四に、教科書の供給側と需要側の構図だけでなく、学校をさらに外から取り巻く、科学教育の専門家、科学者、政府、メディア、産業界等が、21CS をどのように受け止め、いかなる論点で擁護あるいは批判してきたのかについて、言説分析を進める必要がある。

このような要素が関連しあって、一つの教科書の変化を引き起こすポリティクスが生まれたと考えられる。イングランドの一つの教科書の変化を、カリキュラムの社会学の題材として選ぼうとする理由は、以上の見通しからである。日本に比べると、教科書作成の自由度が制度的には高い国だからこそ、知識の伝達のありようを支配するマイクロポリティクスが明らかになりやすいという見込みがある。同時に、いまだ新たな試みが起こる可能性が相対的に期待できる－少なくとも 21CS のような試みが誕生した－地で、カリキュラムに対する支配の構造を明るみに出すことにより、再び新たな試み／試行錯誤を可能にするような、抵抗の糸口を見出したいという希望もある。

④カリキュラムと教師

Twenty First Century Science GCSE Science Higher の第二版において、「予防原則」と「ALARA」が削除された理由として、教科書執筆者や科学教師をはじめとした複数のインタビュー対象者は以下の点を強調した。

・教師と GCSE 試験官からの声:「予防原則や ALARA のような複雑な概念は、試験で評価しにくい。(These complex concepts are not examinable.)」（F 氏）

・採点の透明性・公平性への要請が高まった。（C 氏、F 氏）

・「進学のためには伝統的な科学的事実中心のアプローチが有利だ」（R 氏、S 氏、T 氏）

試験機関や出版社は、マーケティングによ

って、このような学校現場サイドの意見を把握し、試験および教科書の市場に対応せねばならなかった。教科書執筆者の中には、「Science と School Science は違う」(D 氏)と表現した者もいた。すなわち、学校現場からの要請に基づくプラクティカルな理由によって、外部試験への対応が求められ、予防原則や ALARA は削除されたという説明がなされたのである。予防原則や ALARA の削除は、政府からの圧力や政治的理由によるものではないと付け加える者も複数いた。

しかしながら、すべての‘プラクティカルな’変化は、政治的結果をもたらすということに、私たちは自覚的であるべきだろう。それだけではない。一見、プラクティカルな理由に見える現象でも、このような変化がもたらされた背景には、政府による GCSE 試験改革やレギュレーション組織の改編等が環境的／潜在的に関係している(I 氏)。また、英国において進行した、ニュー・パブリック・マネジメントにおける学校評価と教育の市場化等の動向も、教育内容の examinability を要請し、「予防原則」や ALARA が削除されてゆく状況に拍車をかけたといえる。

このようなカリキュラムの変化は、教職という仕事の社会的意味と役割を大きく左右するものである。同時に、教職という仕事を遂行することを目的とした行為は、以上のようなルートで、カリキュラムを制約する可能性がある。本研究は、教職という仕事を、カリキュラムとの関連で比較社会学的に検討するという分析枠組みの重要性を明らかにした。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　5　件）

・金子真理子 2013「カリキュラムの社会学序説－イングランドにおけるサイエンスの教科書に注目して－」『子ども社会研究』19 号、ハーベスト社、2013 年 6 月、pp.145-159.単著（R）

・金子真理子 2012「リスク社会と教師－新たな「日常」に向けて－」『発達』第 130 号、ミネルヴァ書房、2012 年 4 月、pp.27-34.単著

・金子真理子 2011「生徒へのまなざしはどう変わったか？－経年比較教師調査をもとに」『青少年問題』第 643 号（第 58 巻夏季号)、財団法人青少年問題研究会、2011 年 7 月、pp.38-43．単著(R)

・金子真理子 2011「教師のストレスの規定要因構造－高校教師に対する質問紙調査をもとに－」『教員養成カリキュラム開発センター研究年報』vol.10、東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター、2011年3月、pp.23-31．単著

・金子真理子 2010「教職という仕事の社会的特質－「教職のメリトクラシー化」をめぐる教師の攻防に注目して－」『教育社会学研究』第 86 集、東洋館出版社、2010 年 6 月、pp.75-94.単著（R）
http://ci.nii.ac.jp/els/110009553979.pdf?id=ART0009998702&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1402840547&cp=

〔学会発表〕（計　4　件）

・金子真理子「教員評価制度の導入が教員社会にもたらすもの－誰が「分断」されるのか？－」日本社会病理学会シンポジウム『社会的分断化のメカニズムを問うⅢ－教育における文化と分断－』のシンポジスト、日本社会病理学会第 29 回大会、國學院大學、2013 年 9 月 29 日、要旨集録 p.24.

・金子真理子「「予防原則」と「ALARA」はなぜ削除されたのか？－イングランドのサイエンスの教科書の変化に注目して－」日本教育社会学会第 65 回大会、埼玉大学、2013 年 9 月 13 日、要旨集録 pp.34-35.

・金子真理子「生徒へのまなざしはどう変わったか？－経年比較教師調査をもとに」関東教育学会公開シンポジウム『21 世紀初頭の日本の学校教育をどう見るか』のシンポジスト、関東教育学会第 59 回大会、東京学芸大学、2011 年 11 月 13 日、「関東教育学会紀要」第 39 号 pp.65-67.

・金子真理子、早坂めぐみ「教員養成の理念・実態・機能－創成期の東京学芸大学生に対する調査をもとに－」日本教育学会第 70 回大会、千葉大学、2011 年 8 月 22 日、要旨集録 pp.284-285.

〔図書〕（計　2　件）

・金子真理子 2013「1 章　教員養成改革の動向と大学の役割－答申における「教員の資質能力」の変化に注目して－」岩田康之・別惣淳二・諏訪英広編『小学校教師に何が必要か』東京学芸大学出版会、2013 年 7 月、pp.24-35.分担執筆

・金子真理子 2012「学力と階層」「教師の役割」「教師の多忙化、バーンアウト」「変わる教員養成」、酒井朗・多賀太・中村高康編著『よくわかる教育社会学』ミネルヴァ書房、2012 年 4 月、pp.38-39、pp.64-69.分担執筆

６．研究組織

(1)研究代表者

金子　真理子　(KANEKO, Mariko)
東京学芸大学・教員養成カリキュラム開発研究センター・准教授
研究者番号：70334464

(2)連携研究者

勝野　正章（KATSUNO, Masaaki）
東京大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：10285512

(3)研究協力者

Meg Maguire
King’s College London・Professor
Bob Burstow
King’s College London・Professor